

子どもの「読むこと」を支える現場の取組み — 八戸市域における事例からの考察 —

企画者・司会：戸田山みどり（八戸工業高等専門学校名誉教授）

話題提供：鈴木康弘（八戸学院大学短期大学部）

話題提供：森花子（八戸ブックセンター）

2001年12月に公布された「子どもの読書活動の推進に関する法律」では、その基本理念として「子ども（おおむね十八歳以下の者をいう。以下同じ。）の読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものであることにかんがみ、すべての子どもがあらゆる機会とあらゆる場所において自主的に読書活動を行うことができるよう、積極的にそのための環境の整備が推進されなければならない」（第二条）と謳われている。

広い意味での読書の能力（読む力・リテラシー）は、現代社会においては最も基本的な教育目標の一つである。2018年に発表された国際リテラシー学会による「子供の読む権利」宣言においては、第5条に「子供は、楽しみのために読む権利を有しています」として、読書の娯楽・遊びとしての意義と、子どもの「遊ぶ権利」を接続している一方で、教育目標としての重要性も指摘している（第10条に関する英語版の解説）。そして、その認識が第10条「子供は、官公庁および、読み書き指導を支援する組織から経済的および物質的な援助を受ける権利を有しています」の根拠となっている。この宣言においては、「子どもの読書活動の推進に関する法律」では明示されなかった官公庁の役割が明言されている。

本ラウンドテーブルでは、子どもの「楽しみのために読む権利」を出発点として、教室における狭い意味での学校教育の範囲の外に広がる子どもの読書を支える諸活動について、八戸市内で実際に行われている取組みを実例として紹介しながら、今後の可能性について検討したい。具体的には1) 戸田山が上記の読書推進の理念や全国の取組みを確認、2) 鈴木による八戸市周辺の園における未就学児を対象とした絵本を核とした取組みの分析、3) 八戸市直営の施設である八戸ブックセンターが目指す市民への情報提供と文化活動としての子どもの本の紹介事業を担当者である森が報告、4) 戸田山が、八戸市のもう一つの取組みである小学生へのブッククーポン配布事業に合わせて行われている「おすすめ図書」の選書における地域性尊重の基準について説明する。乳幼児から小学校卒業に至るまでのシームレスなサポートを実現する方策の可能性について、フロアからの意見を求めたい。

社会・文化の中での学びと成長、そして幸福とは？ — 脳科学、行動遺伝学、教育学の融合・架橋からみえるもの —

企画者・司会・話題提供：仁木 和久（脳認知科学研究所）

話題提供：安藤 寿康（慶應義塾大学）

話題提供：緩利 誠（昭和女子大学全学共通教育センター）

人間は、社会・文化の中で主体的に「学び、成長」する唯一の存在である。さらに、人間が創りあげた教育という社会システムは、長期の教育期間をかけて個々人の「学び、成長」を促進し、社会・文化の担い手としての社会的行為者を育て、結果として社会・文化をも「成長」させる原動力となる。本ラウンドテーブルでは、この「社会・文化の中での学びと成長と教育の関係」について、生涯にわたる「学びと成長」を支えている生物学的仕組みをもとに、脳科学的、行動遺伝学的、教育学的に探求・議論する。

まず、教育学から、724名の高校生を対象とするWeb調査の結果について、目下進行中の教育改革の理念と実態の関係に注目した解析結果を報告する。具体的には、創造的な行為主体性を育むための教師の働きかけがどの程度行われているのか、その成果（理念との一致）と課題（理念との乖離）はなにかを、Well-beingとの影響関係も含めて、高校生の経験レベルから紐解く。

脳科学からは、社会・文化の中で学び、成長する子どもの脳の中で何が起きているかを示す。人間の学びも成長も、大きく社会・文化的な影響を受け「脳概念システム」を発達させる。それは、生まれた直後からの脳の発達と同期しつつ、段階を踏み青年期まで継続する長期的な発達であり、教育は、脳概念システムの発達に制約されると共に、その発達に大きく影響を与える。脳概念システムは、Enactive Brain（積極的な脳）の「自己脳@PCC、TPJ」の中に行行為者の体験・経験の物語（自伝的記憶）を形成し、主体的行為者の生き方に意味を与える。はたして、今の教育と学びは、彼らの自己物語にどのように登場し、幸福や自己現実感を与えられているだろうか？

行動遺伝学からは、高校生が学校の多様な文化環境で、教科学習とは独立に自分のニッチで学習を構築しており、学校が教科学習を超えて遺伝的資質の発見と開発に寄与していることについて話題提供する。あわせて、遺伝の影響が大きい論理的情報処理機能と環境の影響が大きい自己や社会性に関わるネットワークについて、教育がこれらをバランスよく結びつけ、言語を通じて概念化する学習機会を提供する必要性を考察する。

最後に、これら3つを統合した視点から、子どもたちの学びと成長が、本来、どのようにあるべきで、その為に我々が、そして教育がどのように関わるかを皆様と一緒に検討したい。

乳幼児期におけるデジタルトラスト形成について — 阻害要因やメカニズムとステークホルダーの課題の検討 —

企画者・司会：佐藤朝美（愛知淑徳大学人間情報学部）

話題提供：大久保圭介（国士舘大学文学部）

話題提供：佐藤鮎美（島根大学人間科学部）

話題提供：佐藤賢輔（東京大学大学院教育学研究科）

指定討論：板倉昭二（立命館大学 OIC 総合研究機）

デジタルメディアは現代の子どもたちの生活に浸透しており、特に乳幼児期は家庭で接することが多く、その影響は大きい。本ラウンドテーブルでは、乳幼児期におけるデジタルトラスト形成の重要性に焦点を当て、その課題と解決策について議論する。デジタルトラストには、デジタルメディア自体への信頼、デジタルメディアを通じて得られる情報への信頼、そしてデジタル環境で育つことによる対人信頼の形成が含まれているが、乳幼児期はその萌芽が形成される時期と捉えている。

まず、デジタルトラスト形成における阻害要因として、保護者の多くが不安を抱える「依存」が挙げられる。既に0歳児からも動画を長時間視聴するケースがあることが調査で明らかになっている。また、現在のデジタルデバイスは高性能であり、創造的、教育的な活用に可能性があるとの指摘があるが、実際には動画視聴にとどまっていることが多い。動画のコンテンツの質の担保方法とともに、創造的、教育的な活用方法についても検討していく必要がある。

さらに、デジタルメディア環境の提供だけでなく、介入する保護者の役割は大きい。保護者がどのようにデジタルデバイスを使用し、子どもにどのような影響を与えるかについての知識やスキルの向上が求められる。加えて、園でのICT導入も始まっており、保育者の知識やスキルが問われている。保育者がデジタルデバイスを効果的に活用し、子どもたちのデジタルトラストを育むための教育や研修が必要である。子どもたち自身のデジタルトラストの発達的变化と保護者や保育者の信念・態度、リテラシーとの関連も検討する必要がある。

以上のように、デジタルトラスト形成の阻害要因やメカニズムとその課題を共有すべきステークホルダーは多岐にわたる。研究者、保育者、保護者、コンテンツ・アプリを制作する企業、政策立案者などが挙げられる。各ステークホルダーが抱える課題とその解決策について議論を行い、具体的な研究課題を導き、今後の実践を検討することが重要である。

本ラウンテーブルでは、話題提供者とフロアの参加者と共に、研究課題やステークホルダーへの具体的な実践や政策への反映方法に関する議論を通して、乳幼児期のデジタルトラスト形成に向けた新たな方向性を見出し、未来の子どもたちの健全な発達を支えるための基盤を築くことを目指す。

子どもの育ちを支える保育の専門性と質 — 保育者養成における絵本の学びを通して —

企画者・司会・話題提供：小屋美香（育英短期大学保育学科）

話題提供：増山由香里（札幌国際大学人文学部）

話題提供：前徳明子（埼玉東萌短期大学幼児保育学科）

指定討論：鈴木みゆき（國學院大學人間開発学部）

子どもが人生をより深く生きる力を身につけていくことを目指して、「子どもの読書活動の推進に関する法律」が2001年に制定され、読書環境の整備が進められてきた。絵本を読みあうことの大切さも認知されるようになり、乳児期から絵本に親しむ機会は増えてきている。しかし、絵本の環境は家庭によって格差があることも否めない。子どもたちが絵本に出会う機会を保障することが可能な保育現場の役割は大きく、そこでは保育者としての専門性が必要とされる。

保育者養成課程には、絵本について学ぶ科目が複数あるが、より体系的かつ専門的に学ぶことができるのが2019年にスタートした「認定絵本士養成講座」のカリキュラムである。絵本の魅力や可能性を伝えることができる人材の育成を目的として、国立青少年教育振興機構が2014年に「絵本専門士養成講座」を開設した。

それと同様の内容を学生のうちに学ぶことができるのが認定絵本士養成講座である。2024年5月現在、57機関59学科が開設しており、今後も増えていくことが予想される。一方で、少子化の加速と共に、保育者養成が非常に厳しい状況にあることも事実である。保育の量的拡充と質の改善は長年両輪で進められてきたが、これからは今まで以上に質の向上が求められることになるだろう。質的転換の重要な時期にあると言える。

そこで本ラウンドテーブルでは、子どもにとって大事な物的環境としての絵本と、その環境を用意することができる人的環境としての認定絵本士（保育者）の役割について考えることを通して、養成校からつながる保育の専門性と質の向上に向けての検討を行っていく。

一つ目の話題提供では、勤務校において認定絵本士養成講座を開設することになった経緯や目的、保育の中の絵本や環境のあり方について、今後の展望も含めて話をしていただく。二つ目として、開設校での実際の授業の様子、講座を通しての絵本に関する学びが学生にもたらした様々な影響などについて報告をしていただく。企画者と共に、認定絵本士を対象に行ったインタビュー調査によって得られた知見をもとに、その成果や課題についても話題提供を行う予定である。

そして、絵本専門士・認定絵本士養成講座の制度設計に携わり、現在も委員として関わりを持つ鈴木氏に指定討論をしていただく。それぞれ専門分野の異なる登壇者とフロアの皆様とで共に議論を交わし、幅広い視野で子どもをみつめなおす機会になることを願っている。